

一念三千法門

正嘉二年 三七歳

法華經の余經に勝れたる事何事ぞ。此の經に^{いっしんさんがん}一心三觀・一念三千と云ふ事あり。薬王菩薩漢土に出世して天台大師と云はれ、此の法門を覚り給ひしかども、先づ^{げんぎ}玄義十卷・^{もんぐ}文句十卷・^{かくいさんまい}覺意三昧・^{しょうしかん}小止觀・^{じょうみょうしよ}淨名疏・^{しねんしよ}四念処・^{しだいぜんもん}次第禪門等の多くの法門を説きしかども、此の一念三千の法門をば談じ給はず、百界千如の法門^{ぼか}計りなり。御年五十七の夏四月の^{ころ}比、^{けいしゅうぎよくせんじ}荊州玉泉寺と申す処にて、御弟子^{しょうあん}章安大師に教へ給ふ止觀と申す文十卷あり。上四帖に^{なお}猶秘し給ひて、但六即四種三昧等計りなり。五の卷に至りて十境・十乘・一念三千の法門を立て「^{それ}夫一心に具す」等云云。是より二百年後に^{みょうらく}妙樂大師積して云はく「^{かな}当に知るべし、身土一念の三千なり。故に^{じょうどう}成道の時此の本理に稱ひて一身一念法界に^{あまね}遍し」云云。此の一念三千・一心三觀の法門は、法華經の一の卷の十如是より起これり。文の心は百界千如三千世間云云。さて一心三觀と申すは、余宗は如是とあそばす。是^{ひがごと}僻事にて二義かけたり、天台・^{なんがく}南岳の御義を知らざる故なり。されば当宗には天台の所釈の如く三遍読むに功德まさる。第一に是相如と相・性・体・力以下の十を如と云ふ。如と云ふは^{くう}空の義なるが故に十法界皆^{くうたい}空諦なり。是を読み觀ずる時は我が身即報身如来なり。八万四千又は^{ほんにや}般若とも申す。第二に如是相は是我が身の色形顕はれたる相なり、是皆^け仮なり。相・性・体・力以下の十なれば、十法界皆^{けたい}仮諦と申して仮の義なり。是を読み觀ずる時は我が身即^{げだつ}応身如来なり。又は解脱とも申す。第三に相如是と云ふは、^{ちゅうどう}中道と申して^{ほっしん}仏の法身の形なり。是を読み觀ずる時は我が身即法身如来なり、又は^{ほっしょう}中道とも^{ねはん}法性とも^{じゃくめつ}涅槃とも^{ほつ}寂滅とも申す。此の三を^{ほつ}法・^{ぼう}報・^{おう}応の三身とも、^{しきそう}空・^{すべ}仮・中の三諦とも、^{くきょう}法身・^{ほんがく}般若・解脱の三徳とも申す。此の三身如来全く外になし。我が身即^{くきょう}三徳究竟の体にて三身即一身の本^{ほんがく}覚の仏なり。是をしるを如来とも聖人とも悟りとも云ふ。知らざるを凡夫とも衆生とも迷ひとも申す。

十界の衆生各互ひに十界を具足す、合すれば百界なり。百界に各々十如を具すれば千如なり。此の千如是に衆生世間・国土世間・^{おん}五陰世間を具すれば三千なり。百界と顕はれたる^{しきそう}色相は皆^{すべ}総て仮の義なれば^{げだつ}仮諦の一なり。千如は総て空の義なれば^{くうたい}空諦の一なり。三千世間は総じて法身の義なれば中道の一なり。法門多しと雖も但三諦なり。此の三諦を三身如来とも三徳究竟とも申すなり。始めの三如是は本覚の如来なり、終はりの七如是と一体にして無二無別なれば本末究竟等とは申すなり。本と申すは^{ほんがく}仏性、末と申すは

未^み頭^{けん}の仏、九界の名なり。究竟等と申すは妙覺究竟の如来と、理^り即^{そく}の凡夫なる我等と差別なきを究^く竟^{きやうとう}等^{びやうどうだいえ}とも、平^{へい}等^{とう}大^{だい}慧^えの法華經とも申すなり。始めの三如是は本覺の如来なり。本覺の如来を悟り出だし給へる妙覺の仏なれば我等は妙覺の父母なり、仏は我等が能^{のう}生^{しょう}の子なり。止の一に云はく「止は即ち仏の母、觀は即ち仏の父なり」云云。譬へば人十人あらんずるが面々に蔵々に宝をつみ、我が蔵に宝のある事を知らず、かつへ死しこゝへ死す。或は一人此の中にかしこき人ありて悟り出だすが如し。九人は終に知らず。然るに或は教へられて食し、或はくゝめられて食するが如し。弘の一の「止觀の二字は正しく聞体を示す」と聞かざる者は本末究竟等も徒^{いたずら}か。子なれども親にまさる事多し。重^{ちゆう}華^かはかたくなはしき父を敬ひて賢人の名を得たり。沛公は帝王と成りて後も其の父を拜す。其の敬はれたる父をば全く王といはず、敬ひし子をば王と仰ぐが如し。其れ仏は子なれども賢くましまして悟り出だし給へり。凡夫は親なれども愚癡にして未だ悟らず。委^{くわ}しき義^ぎを知らざる人、毘^び盧^るの頂上をふむなど悪口す、大なる僻^{ひがごと}事なり。

一心三觀に付いて次第の三觀・不次第の三觀と云ふ事あり。委しく申すに及ばず候。此の三觀を心得すまじ成就したる處を、華嚴經に「三界唯一心」云云。天台は「諸水入海」とのぶ。仏と我等と総て一切衆生理性一にてへだてなきを平^{へい}等^{とう}大^{だい}慧^えと云ふなり。平等と書いてはおしなべてと読む。此の一心三觀・一念三千の法門諸經にたえてこれなし。法華經に遇はざれば争^{いか}でか成仏すべきや。余經には六界八界より十界を明かせどもさらに具を明かさず。法華經は念々に一心三觀・一念三千の謂れを觀ずれば、我が身本覺の如来なること悟り出だされ、無^む明^{みやう}の雲晴れて法性^{ほっしょう}の月明らかに、妄想の夢醒めて本覺の月輪いさぎよく、父母所生の肉身煩惱具足の身、即ち本有常住の如来となるべし。此を即身成仏とも煩惱即菩提とも生死即涅槃とも申す。此の時法界を照らし見れば、悉く中道の一理にて仏も衆生も一なり。されば天台の所積に「一色一香中道に非ざること無し」と積し給へり。此の時は十方世界皆寂光淨土にて、何れの處をか彌陀・薬師等の淨土とは云はん。是を以て法華經に「是の法、法位に住して世間の相常住なり」と説き給ふ。さては經を読まずとも、心地の觀念計りにて成仏すべきかと思ひたれば、一念三千の觀念も一心三觀の觀法も妙法蓮華經の五字に納まれり。妙法蓮華經の五字は又我等が一心に納めて候ひけり。天台の所積に「此の妙法蓮華經は本地甚深の奥蔵、三世の如来の証得したまふ所なり」と積したり。さて此の妙法蓮華經を唱ふる時、心中の本覺の仏頭はる。我等が身と心をば蔵に譬へ、妙の一字を印に譬へたり。天台の御積に「秘密の奥蔵を発^{ひら}く、之を称して妙と為す。権実の正軌^{しょうき}を示す、故に号して法と為す。久

遠の本果を指す、之を喩ふるに蓮を以てす。不二の円道に会す、之を譬ふるに華を以てす。声仏事を為す、之を称して経と為す」と釈し給ひ、又「妙とは不可思議の法を褒美するなり。又妙とは十界・十如・権実の法妙」云云。経の題目を唱ふると観念と一なる事心得がたとしと愚癡の人は思ひ給ふべし。されども天台止の二に「而於説黙」と云へり。説とは経、黙とは観念なり。又四教義の一に云はく「但功の唐捐ならざるのみに非ず、亦能く理に契ふの要なるをや」云云。天台大師と申すは薬王菩薩なり。此の大師の説而観而と釈し給ふ。元より天台の所釈に因縁・約教・本迹・観心の四種の御釈あり。四種の重を知らずして一しなを見たる人、一向本迹をむねとし、一向観心を面とす。法華経に法・譬・因縁と云ふ事あり。法説の段に至りて諸仏出世の本懐、一切衆生成仏の直道と定む。我のみならず、一切衆生直至道場の因縁なりと定め給ひしは題目なり。されば天台玄の一に「衆善の小行を会して広大の一乗に帰す」と。広大と申すは残らず引導し給ふを申すなり。仮使釈尊一人本懐と宣べ給ふとも、等覺以下は仰いで此の経を信ずべし。況んや諸仏出世の本懐なり。禪宗は観心を本懐と仰ぐとあれども其れは四種の一面なり。一念三千・一心三觀等の観心計り法華経の肝心なるべくば題目に十如是を置くべき処に、題目に妙法蓮華経と置かれたる上は子細に及ばず。又当世の禪宗は教外別伝と云ひ給ふかと思へば、又捨てられたる円覺経等の文を引かるゝ上は、実経の文に於て御綺ひに及ぶべからず候。智者は誦誦に観念をも並ぶべし。愚者は題目計りを唱ふとも此の理に会ふべし。此の妙法蓮華経とは我等が心性、総じては一切衆生の心性八葉の白蓮華の名なり、是を教へ給ふ仏の御詞なり。無始より以来、我が身中の心性に迷ひて生死を流転せし身、今此の経に値ひ奉りて、三身即一の本覺の如来を唱ふるに顕はれて、現世に其の内証成仏するを即身成仏と申す。死すれば光を放つ、是外用の成仏と申す。来世得作仏とは是なり。略挙経題玄収一部とて一遍は一部云云。妙法蓮華経と唱ふる時心性の如来顕はる。耳にふれし類は無量阿僧祇劫の罪を滅す。一念も随喜する時即身成仏す。縦ひ信ぜずとも種と成り熟と成り必ず之に依って成仏す。妙樂大師の云はく「若しは取若しは捨耳に経て縁と成る、或は順或は違終に斯れに因って脱す」云云。日蓮云はく、若しは取若しは捨或は順或は違の文肝に銘ずる詞なり。法華経に「若有聞法者」等と説かれたるは是か。既に聞く者と説かれたり、観念計りにて成仏すべくば若有観法者と説かるべし。只天台の御料簡に十如是と云ふは十界なり。此の十界は一念より事起こり、十界の衆生は出で来たりけり。此の十如是と云ふは妙法蓮華経にて有りけり。此の娑婆世界は耳根得道の国なり。以前に申す如く「当知身土」云云。一切衆

生の身に百界千如・三千世間を納むる謂れを明かすが故に、是を耳に触るゝ一切衆生は
功德を得る衆生なり。一切衆生と申すは草木瓦礫がりやくも一切衆生の内なるか有情。抑草木
は何ぞ。金錍論こんべいろんに云はく「一草・一木・一礫・一塵、各一仏性・各一因果あり縁了
を具足す」等云云。法師品の始めに云はく「無量の諸天・竜王・夜叉・乾闥婆・阿修羅
・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽、人と非人と及び比丘・比丘尼、妙法蓮華經の一偈一句を
聞き、乃至一念も随喜せん者は我皆阿耨多羅三藐三菩提の記を与へ授く」云云。非人と
は総じて人界の外一切有情界うじょうとて心あるものなり。況んや人界をや。法華經の行者は
如説修行せば、必ず一生の中に一人も残らず成仏すべし。譬へば春夏田を作るに早晚あ
れども一年の中には必ず之を納む。法華の行者も上中下根あれども、必ず一生の中に
証得す。玄の一に云はく「上中下根皆記莂きべつを与ふ」云云。觀心計りにて成仏せんと思ふ
人は一方かけたる人なり。況んや教外別伝きょうげべつでんの坐禅をや。法師品に云はく「藥王多く人
ありて在家出家の菩薩の道を行ぜんに、若し是の法華經を見聞し誦誦し書持し供養する
こと得ること能はずんば、当に知るべし、是の人は未だ善く菩薩の道を行ぜず。若し是の
經典を聞くことを得ることあらば、乃ち能善菩薩の道を行ずるなり」云云。觀心計りに
て成仏すべくんば争でか見聞誦誦と云はんや。此の經は専ら聞を以て本と為す。凡そ此
の經は悪人・女人・二乘・闍提せんたいを簡えらばず。故に皆成仏道とも云ひ、又平等大慧とも云
ふ。善惡不二・邪正一如と聞く処にやがて内証成仏す。故に即身成仏と申し、一生に
証得するが故に一生妙覺と云ふ。義を知らざる人なれども唱ふれば唯仏と仏と悦び給
ふ。「我即歡喜諸仏亦然」云云。百千合はせたる藥も口にのまざれば病も愈えず。藏に宝
を持てども開く事を知らずしてかつへ、懷懐に藥を持ちても飲まん事を知らずして死す
るが如し。如意宝珠と云ふ玉は、五百弟子品の此の經の徳も又此くの如く、觀心を並べ
て読むは申すに及ばず。觀念せずと雖も始めに申しつのごとく「所謂諸法如是相如」云
云と読む時は、如は空の義くうなれば我が身の先業せんごうにうくる所の相性体力、其の具する所の
八十八使の見惑、八十一品の思惑、其れ空にして報身如来なり。「所謂諸法如是相」云
云と読めば、是仮の義なれば我が此の身先業に依って受けたる相性体力云云。其の具し
たる塵沙じんじゃの惑、悉く即身応身如来なり。「所謂諸法如是」と読む時は、是中道の義に順
じて業に依って受くる所の相性等云云。其れに随ひたる無明皆退むみょういて即身法身の如来と
心を開く。此の十如是三轉によまるゝ事、三身即一身・一身即三身の義なり。三に分か
るれども一なり一に定まれども三なり。